

父王のお告げ——源氏の場合とハムレットの場合

平川 祐弘

紫式部とシェイクスピアを同一の地平で取り上げたい。そのような時代も文化も異にする、いわば無関係の二作家の絶対的比較ともいふべき *comparaison littéraire* は意味があるのか。『源氏物語』は千年前の日本の男女の心を描いてすばらしい古典だが、Arthur Waley: *The Tale of Genji* もまた二十世紀の英語芸術作品として格段に見事である。そのように日本語原文だけでなく、ウェーリー英語訳文をも綿密に教室で読んだことがきっかけで、『源氏物語』を他の英語作品と並べて比べたい誘惑にかられた。須磨明石の巻を読むうちに「父王ふおうのお告げ」の場面で、『ハムレット』を思い出したからである。それでとりとめもない文藝比較に陥ることのないよう、源氏の場合とハムレットの場合を「父王のお告げ」の場面に限って論評することとした。

大宗教は人間の思考や感情に強い影響を与えた。東洋における仏教、西洋におけるキリスト教などは人の考え方、感じ方に刻印を残した。文学作品もその感化を免れない。仏教と『源氏物語』、キリスト教と『神曲』などは、多くの論文の主題となっている。しかしそのような後来の大宗教の深いインパクトにもかかわらず、文学作品には仏教伝来やキリスト教宣教以前の、超自然的な宗教的要素もまた強力な発想源として作用している。その点を見落とし

てはならない。

『源氏物語』を読んで印象深かった条りは、女主人公が物の怪にとりつかれる場面である。物の怪はパウンドやウェーリーの手で evil spirit とか ghost とか demon とか訳され、それにとりつかれることは possessed と呼ばれている。物の怪は仏教が導入される以前から日本に存在した。死霊・生霊が祟るのだという。仏教が伝教される以前の日本人の信仰はおおづかみにして神道と呼ばれるが、その土俗的な信仰の迫力、それが宗教としての価値はともかくとして、心理的には、ということとは文芸的には、強烈に日本文学に作用している。物の怪は『源氏物語』だけでなく、その四百年後に『源氏』に材を求めて作られた夢幻能にも登場する。『源氏』の中でも物の怪を鎮めるために坊様がお経を唱える。夢幻能も最後にワキの僧侶がお祈りの文句を唱えることで霊や鬼は退散する。

仏教以前の信仰と仏教の関係はそのようであったから、岡崎義恵教授は『源氏物語』における宗教を論じ、仏教の重要性を次のように強調した。「物の怪の力も世界を動かすこともあるが、これは出現の度数も少なく、重大性にも乏しく、また仏教の力で退散されることがあるので、仏教よりは低い位置にある。その上、今日から見れば余りに迷信的で、宗教的地盤も不確実である……」¹。仏教の方が上だ、物の怪などは迷信だ、と日本の代表的な国文学者はすこぶる単純な常識論で割り切ったが、はたしてこれで文学解釈として有効であろうか。

私見では、六条の御息所みやすじょうの物の怪が能作者によって再三とりあげられたのは、物の怪がいかにインプレシヴであるかを証拠だてるものである。物の怪が主役のシテである。能舞台でワキの坊様が呪文のようにお経の文言を唱え、それで最後に物の怪が姿を消すのは、演劇をしめくくるための方便にしか過ぎない。西洋演劇で deus ex machina 機外神という演劇を大団円に導く解決法があるが、その際登場するデウスは信仰上価値ある神とはいえない。それになぞらえていえば、夢幻能のワキの僧侶による解決法は buddha ex machina とでもいべきもので、いわば演劇

の convention 方便である。『源氏物語』の中で仏教にまつわる行事などはファッションナブルで確かに度数も多い。貴族社会の中での重要性はわかる。しかし精神世界に与えるインパクトは、

宗教的地盤は確実ではないかもしれないが、物の怪の出現には到底及ばない。ウェーリーも『源氏』の中で「並々ならぬリアリティー」を感じさせる場面として、夕顔の死、賀茂の祭りの車争い、源氏の北山行き、葵の死の四つをあげ「一読すれば終生忘れることの出来ない情景である」としている。『源氏』の中では舶来の宗教としての仏教は高級感があり、表面的にはきらびやかだが、夕顔や葵上にとりついた物の怪の迫力には及ばない。「物の怪」とは仏教とかキリスト教とかの大宗教以前のものだが、文学では実はそうしたプリミティブなものもまた大切なのである。日本文学のインスピレーションの源の一つは ghostly Japan にあるのではないだろうか。ちょうどアイランド文学のインスピレーションの一つが ghostly Ireland であるようにⁱⁱ。

西洋でもシェイクスピアの『夏の夜の夢』などはキリスト教以前のフェアリーや夢の魅力が働いている。かつては学問の対象外とされた「夢」は、理性では律し難い。実は「夢」も「物の怪」のすぐ近くに位置するなにかなのではあるまいか。「物の怪」というと世間は笑って真面目にとりあげようとしない。それは「物の怪」が特殊日本的であるという印象を与えるからだろう。それで物の怪に並ぶ夢の効用について、夢は東洋にも西洋にもある普遍的な現象だから、まずこの夢をとりあげ、源氏の場合とハムレットの場合について「父王のお告げ」という共通項をたよりに文藝比較を試みてみよう。禊みそぎとか物の怪とかいうと、神道だ、日本人の迷信だ、と小馬鹿にする人が日本人の間からも出るが、ハムレットの前に夜な夜なあらわれる父の王のお告げとなると、西洋人でも迂闊うかつに馬鹿には出来ない。フロイド以来、夢は学問の対象となり、文学解釈の鍵ともなったからである。それではそのような比較の大枠を設定した中で、まず源氏の夢枕に立つ桐壺院を見てみよう。

都にいた光源氏は自分を取り巻く周囲の情勢の悪化を恐れて、ある年の三月、自ら田舎も田舎、須磨に退去することを決意した。そして流竄るざんの思いに嘆きわび、秋、冬を過ごす。須磨の巻の終わり近くにこのように出ている。次の年の三月、弥生やよいの朔日ついなち、

「今日けふなむ、かく思すことある人は、禊みそぎしたまふべき」と、なまさかしき人の聞こゆれば、海づらもゆかしうて出でたまふ。

お祓はらいをして座している源氏の姿は、

さる晴はれに出でて、言ふよしなく見えたまふ。海の面おもてうらうらと凧なぎわたりて、行く方ゆへもしらぬに、来し方行く先思しつづけられて、

八百よろづ神もあはれと思ふらむ犯せる罪のそれとなければ

と自分の無実を訴える。すると、

にはかに風吹き出でて、空もかきくれぬ。御祓へもしはてず、立ち騒さわぎたり。肱ひぢがき笠雨とか降りきて、いとあわたたしければ、みな帰りたまはむとするに、笠も取りあへず、さる心もなきに、よろづ吹き散らし、またなき風なり。波いといかめしう立ち来て、人々の足をそらなり。海の面おもては、袞ふすまを張りたらむやうに光り満ちて、

雷鳴りひらめく。落ちかかる心地して、からうじてたどり来て、「かかる日は、見ずもあるかな」「風などは、吹くも気色づきてこそあれ。あさましうめづらかなり」とまどふに、なほやまず鳴りみちて、雨の脚、当たる所徹りぬべくはらめき落つ。かくて世は尽きぬるにやと心細く思ひまどふに、君はのどやかに経うち誦しておはす。

暁方に寝入った時、

そのさまとも見えぬ人来て、「など、宮より召しあるには参りたまはぬ」とて、たどり歩くと見るに、おどろきて、さは海の中の竜王の、いといたうものめでするものにて、見入れたるなりけりと思すに、いとものむつかしう、この住まひたへがたく思しなりぬ。

なんとも正体の知れない者が夢に現われた。昼間高潮の海に吞まれかけた源氏は、さては竜宮の王に見込まれたか、と不気味に思い、須磨に住むことに不安がつゆる。この意想外な海浜での暴風雨は一体なにを意味するのか。浜辺での被によって惹き起こされた感じが強いだけに、源氏の運命について思いを寄せる読者の緊張もにわかにもまる。もちろん源氏自身もたいへん緊張している。そしてそこで須磨の巻は終わる。暴風雨はゲーテの『ウェルテル』でもベートーヴェンの『田園』でも、あるいはダンテの煉獄篇第五歌でも印象的だが、広い意味でロマンティックである。では次の巻でどのような展開となるか。趣向を変え、次の明石の巻の出だしをまずウェーリー訳で読んでみよう。

The bad weather continued; day after day nothing but rain, wind and repeated thunderstorms, bringing with them countless troubles and inconveniences. So depressing was the past to look back upon and so little hope did the future hold out for him that, try as he might, Genji could no longer keep up even the appearance of cheerfulness. His prospects were indeed dark. It was just possible that he might some day be permitted to return to the Capital. But with the dominant faction at Court still working against him he would be subject to unendurable slights and vexations. He thought more than once of withdrawing from the coast and seeking shelter at some point well back among the inland hills. But he knew that if he did so it would be said he had been scared away by a few days of foul weather. The smallest actions of people in his position are recorded, and he did not care to figure in the history-books as the Prince who ran away from a storm. Night after night he had the same dream of a messenger summoning him to the realms below the sea. It seemed as though the Dragon of the Ocean had indeed set his heart upon him. (p.255)

この英文を読むと、源氏が置かれている状況が物理的なクライメートだけでなく政治的なクライメートもよくわかる。源氏の心理状態もわかる。実はこの原文は短い。その八行ほどの原の和文を訳者ウェーリーがパラフレーズして状況説明を加えたから、このように話を通じやすくなったのである。『神曲』各歌の訳の前に訳者が説明を数行加えているが、ウェーリーはそれを本文中にそしらぬ顔で書き込んだ。正宗白鳥以来いわれてきたウェーリー訳で読むと原文よりもわかりやすい、という一例である。さて嵐はなお止まず幾日も吹き荒れる。それでも紫の上の使いが都からみじめな格好をしてたどり着いた。みじめなのは嵐のせいもあるが、源氏に公然と接触することがため

らわれるから、そんな姿をして人目をまぎらわして来たのである。その報告によると、都でも天候異変が続く「まつりごととも絶えてなむはべる」国政も滞るほどだという。「いとかく地の底徹るばかりの氷降り、雷の静まらぬことははべらざりき。」雹まで降った。そして須磨でもその次の日の暁から、

風いみじう吹き、潮高う満ちて、波の音荒きこと、巖も山も残るまじきけしきなり。雷の鳴りひらめくさまさらには言はむ方なくて、落ちかかりぬとおぼゆるに、あるかぎりさかしき人なし。

居合わせる者は誰一人生きた心地もしない。その高潮と雷鳴の中、源氏は住吉明神に祈るが、雷が源氏のおまし所に落ちた。

炎燃えあがりて廊は焼けぬ。心魂なくて、あるかぎりまどふ。背後の方なる大炊殿と思しき屋に移したてまつりて、上下となく立ちこみて、いとらうがはしく泣きとよむ声、雷にもおとらず。空は墨をすりたるやうにて日も暮れにけり。

さて荒天もようやく鎮まるかとみえた三月十三日の夜、疲れはててまどろんだ源氏の夢枕に人影があらわれた。ここもまず英訳で読んでみる。

...when suddenly and quite unexpectedly he fell into a doze and dreamed that his father, looking

exactly as in the old days when he was on the throne, stood beside the crazy bed which had been improvised for him in this disordered place. 'How comes it that you are sleeping in such a place as this?' the vision asked, and taking his hand made as though to drag him from the bed. And again, 'Put your trust in the God of Sumiyoshi. Leave this place, take to your ship and He will show you where to go.' What joy it was to hear that voice once more! 'Father,' Genji answered, 'since your protection was taken from me nothing but sorrow and ill-fortune have befallen me, and now I am fully expecting to perish miserably upon this forsaken shore.' (p.258)

調理場（大炊殿）という乱雑な場所が御座所となったから「かたじけなきおましどころ」と紫式部は言った。その様をウェーリーは crazy bed と英訳して等価語としたのである。この部分と少し先まで原文を引くと、源氏は疲れたので、

……心にもあらずうちまどろみたまふ。かたじけなき御座所おましどころなれば、ただ寄りゐたまへるに、故院こゐんただおはしまししさまながら立ちたまひて、「などかくあやしき所にはものするぞ」とて、御手を取りて引き立てたまふ。「住吉の神の導きたまふままに、はや舟出してこの浦を去りね」とのたまはず。いとうれしくて、「かしこき御影に別れたてまつりにしこなた、さまざま悲しきことのみ多くはべれば、今はこの渚なみに身をや棄てはべりなまし」と聞こえたまへば、「いとあるまじきこと。これはただいささかなる物の報いなり。我は位に在りし時、過あやまつことなかりしかど、おのづから犯しありければ、その罪を終をふるほど暇いとまなくて、この世をかへりみざ

りつれど、いみじき愁へに沈むを見るにたへがたくて、海に入り、渚に上り、いたく困じにたれど、かかるついでに内裏に奏すべきことあるによりなむ急ぎ上りぬる」とて立ち去りたまひぬ。

飽かず悲しくて、御供に参りなんと泣き入りたまひて、見上げたまへれば、人もなく、月の顔のみきらきらとして、夢の心地もせず、御けはひとまれる心地して、空の雲あはれにたなびけり。

英訳に「父の亡霊が源氏の手を取って寝台から引きずり出そうとするかのようにであった」とあるが、ウェーリー訳で読むと平安朝の日本人もベッドで寝ているような感じがする。

さてこの故桐壺院が夢枕に立った場面で何を連想するかとクラスで聞いたら、中国からの留学生が『ハムレット』の父王のお告げを連想する、といった。『源氏物語』としてでなく *The Tale of Genji* として英語で読んでいたせいか、私も教えながら実はそう感じていた。そのような連想が東アジアの人にも自然に湧く。それにもかかわらず、チェックしてみると、両者の比較論はまだないらしい。『源氏物語』と『失われた時を求めて』の比較などはアメリカでも博士論文の主題に選ばれているが、「父王のお告げ」の比較論はまだないようだ。それでこのような比較論をあつかましくも述べることにした。

日本では昨今『源氏物語』の内容より『ハムレット』の内容の方に詳しい人が多いらしい。『ハムレット』は、周知のように、舞台はデンマークのエルシノアで、宮城前の高台で深夜に始まる。先の王の亡霊がすでに二晩続けて現われた。それが今夜も真夜中過ぎに現われた。「お崩れあつた先君のそのままのあの姿」と組頭バーナードが脇で言い、ホーレーショが、身の毛もよだつ思いで、亡霊に向って大声で叱りつけるように叫ぶ。

汝本来何者なれば、故のデンマークの大君の武しく莊嚴しい御軍装を僭り奉つて、斯様なる深夜に横行するぞ？ 敢て汝に命令する、語れ。

すると亡霊は、腹を立てたのか、退いて消えてしまう。なおここでは語彙が日本の古典に近い坪内逍遙訳を引いた。青ざめたホーレーショが大シーザー落命の直前、やはり亡者が市中に出た、などと話すうちに、亡霊が再び現われる。またホーレーショが「汝声あらば、予に語れ」というが、遠くで鶏が鳴き、亡霊は消える。このような超自然的要素である亡霊が登場して第一場が始まるからこそ『ハムレット』は興味深いのである。芝居では次いで第二場で亡くなった先王の弟のクロードイヤスと先王の妃ガートルードが登場し、先王の葬儀とそれに引き続き新王クロードイヤスとガートルードの婚儀のことが話される。その席の裏手で母と叔父の結婚に不満のハムレットの耳に、親友のホーレーショの口から昨夜のことが伝えられる。

二夜までも引続き、此なる両士が夜話の折節、草木も眠る真夜中に、世にも不思議なる姿を見たり。其姿たるや、頭より足の爪先まで、甲冑隙間もなく取りよるひ、御父君をさながらの容態にて現れ出で、おごそかなる出陣の歩調にて、怖れ戦ける両士の面前僅か二三尺を隔て、徐々と通行せり。両士は餘りの怖しさに、胆魂も溶解る心地、口を緘みて立つたるまま、物を言ひかけも能せなんだと、さも怖しげに、内々にて物語。手前すなはち両士と共に、第三夜の夜話を仕りしところ、聞きしに違はず、時刻も、姿も、片言の相違無く、現れいでし怪しい幻影。先君を存じをりまするが、其お姿に似たとはおろか、此兩つの手の似たる程にも。

そして父王の表情は不興げというよりも悒鬱であつた、とハムレットに報せられる。こうなればハムレットもじつとしておれない。その夜ハムレットも部下とともに見張場にまた立つことに決めた。第一幕第四場はその高台である。夜半過ぎ「や、あれあれ、あしこへ！」とホーレーショが叫ぶ。亡霊が現れハムレットが叫ぶ。

南無天使、諸天善神、護らせたまへ！ …… 神霊にもあれ、悪鬼にもあれ、天の顯氣を持ち来るとも、地獄の妖氛を携へ来るとも、底意は善にもあれ、悪にもあれ、かかるいぶかしい姿にて来る上は、問答せん。(……) おお、デンマークの大君よ、お答へあれ！ 疑惑を以てわが心を破らしめたまふな。神聖き御法の式を尽して正しう葬られたまうた御軀が、何とて蠟引の墓衣を破り、静閑に御遺骨を埋めまらせたる陵が、何とて磐石の顎を開いて、又も御骸を吐出だしたるぞ？ 何とて甲冑まで隙なく着させて、さらでも凄き月の夜半に、斯くはあくがれいでたまひしぞや？ 人智の及ばぬ不思議を現じて、造化の侏儒たる人間を怖れをののかせん御底意か？ 語らせられたい。何故でござる？ 何の爲に？ 何かわれらに御用がござるか？

すると亡霊がハムレットを招く。部下は引き留めるが「ええ、放せ！」とハムレットは亡霊について行く。すると高台の奥で亡霊は「心を定めてわが語る一大事をよつく聞け。聞いた上は、必ずともに、復讐を忘るまいぞよ」という。その前置きの後「われこそは汝が父の亡霊なれ。非義非道の弑逆の怨を晴らせ、ハムレット」と語り始める。すなわち国王であつた父は自分の弟、ハムレットの叔父にあたるクローディアスの手で毒殺された。そして妃であつたガートルードはいま自分の夫を殺したクローディアスと結ばれようとしている。ガートルードはハムレットの母である。この怨みのこもった秘密を打明けたところで父王の亡霊は消える。

ハムレットがこの秘密を知ったことによつて、全五幕の悲劇『ハムレット』は展開する。しかし亡くなった王である父のお告げは超自然的な現象である。それは亡くなった故桐壺院の夢のお告げが超自然的な現象であるのと同じである。ハムレットの父の亡霊は複数の人の前に現れたという設定になっているから、源氏の夢の中に現れたという源氏の父よりも存在感が強い、という捉え方もあるかもしれない。しかし桐壺院は夢の中とはいえ、源氏の前には現れただけでなく、明石の入道の前にも、さらには源氏の母違いの兄の朱雀帝の前にも引続き現れたという設定になっているから、存在感はやはり強い。明石の巻の先の方にこう出ている。すなわち月のはじめに夢に異形の者が明石の入道に告げ知らせて「十三日にあらたなるしを見せむ。船をよそひ設けて、かならず雨風止まばこの（須磨の）浦に寄せよ」とあったので、こころみに船を用意していたら、たいへんな嵐となった。それが明石から船出したところ、順風が吹き寄せて須磨の浦に到着したのだという。それで源氏も思い切つて明石へ移る決心をする。（そしてそこで源氏は明石の入道の一人娘である明石の君とやがて結ばれるのである。）他方、なんとなく不穩であつたその年、須磨で大暴風雨があつたと同じ三月十三日、京都でも雷が鳴り、稲光がして、南風が騒がしい夜、朱雀帝は次のような夢を見た。父親の故桐壺院が御座所の前の階段の下に立つて、たいへん機嫌が悪く、自分を睨んでいる。

院の帝、御前まへの御階みはしの下もとに立たせたまひて、御気色いとあしうて睨みきこえさせたまふを、かしこまりておはします。聞こえさせたまふことども多かり。源氏の御事なりけんかし。いと恐ろしういとほしと思して、后きさきに聞こえさせたまひければ、「雨など降り、空乱れたる夜は、思ひなしなることはさぞはべる。軽々かろしきやうに、思し驚くまじきこと」と聞こえたまふ。

父親が死後も浄土に成仏せずさまよっていることに朱雀帝はショックを受ける。「ハムレット」の場合も息子は父が焦熱地獄の呵責の炎に焼かれて娑婆で犯した罪業の罪を浄めているⁱⁱⁱ、と聞いて心を痛めるが、朱雀帝とても同じ心境で、それが「いとほしと思して」である。ハムレットも母のガートルードのことを思うが、朱雀帝も母の弘徽殿の太後のことを思う。そして直ちに父の夢を見たことを告げる。しかし母の弘徽殿の太後は源氏を憎む。弘徽殿は源氏の最大の敵である。源氏一派を蹴落として宮中で勢力を確立したいま、折角皇位についた我が子の朱雀帝が夢にうなされたからといって、また追放した源氏が故桐壺院が寵愛した子供であったからといって、手心などを加えてはならない。ハムレットの母ガートルードが政治権力の悪に染まった女として振舞うように、弘徽殿の太後もまた大政治家として息子に諭す。「嵐の夜などに、自分がそうと思ひ込んだことが夢というものにはそのように現れるのです。そう軽々しく信じて、驚いたりしてはなりません」

しかし作者紫式部は二つのことを書き加えることで、この夢にリアリティーを与えた。一つは、

睨みたまひしに見合はせたまふと見しけにや、御目にわづらひたまひて、たへがたう悩みたまふ。

父が自分を怖い眼で睨んだ。その眼に自分の眼が合ってしまった。そのせいだろうか、朱雀帝は夢で父にお会いして以来、眼病を病み耐え難い苦しみである、という。これは心理的に本人に夢の真实性をいかにも確信させるような細部ではないだろうか。二つは、弘徽殿の太後の父親で朱雀帝の外祖父にあたる太政大臣が、もう年であったとはいえ、亡くなってしまったことである。それでさすがの弘徽殿の太後も気が弱くなっている。朱雀帝は性まことに善良で「源氏の君が、実際には罪も犯していないのにこのように逆境に沈んでいるのであるならば、必ずやそ

の報いがあるに違いありません。いまはもう是非元の地位に復帰させましょう」などと弱気になって言い出す。弘徽殿の太后はなにを軽率なことを言う、と腹を立てる。「罪科をおそれて都落ちをした者を三年も経たぬうちに赦免したら世間は何と言うか考えても御覧なさい」と諫める。が年が改まった頃ついに赦免の宣旨は下るのである。

『ハムレット』の場合、叔父と母との仲を疑う気持はハムレットにはもともとあった。父が叔父に毒殺されたのではないかという猜疑心も意識下にあった。それは世間もまた密かに分かち持っていた疑念であろう。しかしそういう解釈と平行して、息子ハムレットの心中にあるほとんどフロイド的でもいえる、母親とその再婚相手の男に対する敵意の表われと取れないこともない。いずれにせよこの冒頭の第一幕の父王のお告げを軸としてシェイクスピアの悲劇の一連の事件は展開する。ハムレットもホーレーショもバーナードも目が覚めた人として故父王の亡霊を見た。その点は源氏や明石の入道や朱雀帝が夢の中で故桐壺院の亡霊を見たのとはニュアンスをやや異にする。シェイクスピア劇の場合は目を覚ました人が見たのだからより真実性がある、とする主張も可能だが、逆に目を覚ました人が亡霊などを見るという設定そのものこそフィクションの度合いが強く、『源氏物語』のように夢の中で見た、という方が自然で現実に入りうる度合いが強い、という反対意見もあり得るだろう。しかも朱雀帝の場合には夢で故桐壺院と眼と眼を合わせたために、眼病を病むというすこぶリアルな裏打ちの細部も書き込まれていた。

紫式部とシェイクスピアなど本来別世界に属する別の文学作品である。しかし故人である先王と世継ぎに擬せられた主人公というシチュエーションがまず共通している。それから先王の夫人である母と主人公との間に複雑な愛憎関係がある。『源氏物語』の場合は弘徽殿の太后は父の正式の夫人であり朱雀帝の母であるが、源氏の実母ではない。藤原家を思わせる有力な家の出身で弘徽殿の父は長年太政大臣であった。『源氏物語』は英国や中国の宮廷内の争いを描いた作品に比べれば、権力や政治をめぐる闘争も女性の嫉妬も残酷苛烈とはいえず、むしろ穏やかな作品

というべきであろう。それは死刑に処せられることの少なかった当時の日本社会の穏やかさの反映でもであろう。それに『源氏物語』は政治人を描いた作品とはいえない。そのような登場女性の中で、政治権力への執着の強さにかけては弘徽殿の太后は群を抜いており、強烈な個性を感じさせるパーソナリティーである。桐壺帝に寵愛された源氏の母の桐壺の更衣がいじめられて死んだのも正妻である弘徽殿の太后以下に憎まれたからである。誰が父王の位を継ぐかという王位継承の件は『源氏物語』でも『ハムレット』でも大問題である。源氏は臣籍降下したことで、王位継承問題にまきこまれることがなくなり、父王の正夫人の憎しみを一応回避したが、『ハムレット』の場合は、ハムレットが先王の後ガートルードの子であり、一人前扱いされるのであれば当然王位を継承する権利があるはずである。だがハムレットは未熟者だ。母ガートルードは父の弟のクローディアスと通じ、それに親しみ、クローディアスが新王となったことを喜んでいいる。ハムレットの母に対する関係は近親憎悪であるから、源氏の場合より複雑である。いずれの場合も権力継承をめぐる不明朗な事態が背景にある。不明朗な事態が続くから、死んだ父王の怨念が晴らされずに残っている。ハムレットの父の場合は弟のクローディアスの手で毒殺されたのかもしれない。そのような可能性まで思い描かれる。しかもかつての王の妻はいま王を毒殺したかもしれぬ王の弟の妻となろうとしている。王が死んでまだ二月も経たぬうちの婚儀である。そのもやもやしたシチュエーションを明確化するものとして、父王のお告げがあった。

ではその際の夢の文芸的効用とは何か。『源氏物語』でもシェイクスピアの悲劇でも亡くなった父王のお告げは、一見父王のお告げのようでもあるが、実はいまも生きている人々の疑心や不安や思い込みを示すものでもある。そのような気分が広く行き渡っているからこそ、超自然的な亡霊の発言も信憑性を持ち得るのだ。この場合父王のお告げは、社会全体が口には出さないが半ば公然と思っていることを実際に口に出した、という機能を果たしている。

しかしあくまで亡霊のお告げであるから、人々は確信は持てない。確信が持てないから作中の当事者にとってもサスペンスがある。それは読者にとってもサスペンスとなるのであり、文芸的にはそれだけ一層興味をひく条件となっているものと思われる。

- i 岡崎義恵『日本古典の美』、宝文館、一九七三年、九一頁
- ii この問題を平川は Sukehiro Hirakawa, "Ghostly Japan as a Source of Literary Inspiration" で論じた。A.V.Liman 教授の *Festschrift* (プラーハで出版予定) に収められる。
- iii 「娑婆にて犯しし罪業」などの坪内訳の表現は仏教の地獄を連想させるかもしれないが、シェイクスピアの原文にはそのようなニュアンスはもちろん無い。